

生徒の適切な人間関係構築をめざした研究

— 予防・開発的教育相談の手法を用いたSNS使用の指導を通して —

長期研究員 猪狩 晃一

I 研究の趣旨

近年、高校生の中でSNS^{※1}に代表される情報通信機器を介したコミュニケーションが急速に普及している。しかし一方では、その使用法に関し、様々な課題が指摘されている。研究協力校の調査では、SNSの使用率は96.9%であったが、「家庭において携帯電話の使用法にルールがある」と答えた生徒の割合は30%を下回っていた。また、SNS使用場面で、誹謗中傷や仲間外れなどが見受けられたり、「いじめ防止対策推進法」においてもいじめの定義に「インターネットを通じて行われるもの」が付加されたりするなど、これら諸問題への対応が喫緊の課題となっている。このような状況下においては、これまで行ってきた情報モラルの指導に加え、全ての生徒を対象としたコミュニケーションの在り方を考えさせる取組や適切な自己表現の支援など、予防・開発的な視点に基づいた教育活動が求められる。

そこで本研究では、情報通信機器を介した友人とのコミュニケーションの在り方のとらえ直しを基盤に、適切な自己表現の在り方などを体得させるとともに、それらのことを通して、生徒の人間関係を構築する力を高めたいと考え、本主題を設定した。

※1 インターネットを利用した個人間のコミュニケーションを促すサービス。

II 研究の概要

1 研究仮説

情報通信機器を介した生徒同士のコミュニケーションの在り方を考えさせる授業に、予防・開発的教育相談の手法を取り入れれば、生徒がより適切な人間関係を築けるようになるだろう。

2 めざしたい生徒の姿

本研究では、生徒が情報通信機器の使用場面において、自他尊重を基に自律的にルールを守ることが

でき、過度な不安のない人間関係が築けるようになることを「より適切な人間関係の構築」とし、めざしたい生徒の姿とした。

3 研究内容と実際

(1) 実態把握

SNSの利用頻度や携帯電話の利用サービス内容、対人関係に関する意識などについてアンケート調査を実施した。

(2) 予防・開発的教育相談の手法を取り入れた授業の考案と実施

対象生徒 A高等学校第1学年 160名

① 第1回「携帯電話による友人間のつながり方をとらえ直す活動」

ア テーマ：「携帯電話はどんな存在か」

イ 活用した手法：ブレインストーミング

相互理解の促進と携帯電話使用上の偏った常識に対する意識の変容をねらいとした授業を実施した。生徒の間でどのように携帯電話が普及しているのかを把握した上で、グループごとに意見を分類・集約する活動を行い、携帯電話がもたらす利便性や即時性のメリットやデメリットを理解させ、どのように携帯電話を使用していきたいかを考えさせた。

② 第2回「他者尊重を促す活動」

ア テーマ：「既読スルーは失礼か」

イ 活用した手法：ケーススタディ

事前アンケートから、多くの生徒がSNSの既読通知機能を見逃している実態が判明した。そこで「既読スルー^{※2}」に関する事例を提示し、これをマナー違反だとする意識の変容をねらいとした授業を実施した。返信が来ないときの不安な気持ちに気付かせるとともに、相手の都合や考え方を尊重することについて、自らの考えを持たせた上で、グループで話し合う活動に取り組みさせた。

※2 メッセージを読んだが、返信をしていない状態のこと。

③ 第3回「場面や状況に応じた適切な表現を身に付ける活動」

ア テーマ：「思いの伝え方を考える」

イ 活用した手法：ソーシャルスキルトレーニング

他者へ配慮しつつ、場面や状況に応じたメッセージを作成することをSNS上のソーシャルスキルと位置付け、その習得をめざす授業を実施した。書き言葉と話し言葉の違いやグループトークにおける同調圧力のしくみ、またいじめの法的な定義とSNS上で起きるいじめの発生のしくみを説明した上で、事例を基に各自が考えたメッセージをグループで検討する活動を通し、よりよい表現を考えさせた。

④ 第4回「適切な自己表現を身に付け、SNS使用上の自律的なルールを作成する活動」

ア テーマ：「自分も相手も大切にしたい表現」

イ 活用した手法：アサーショントレーニング

自他の個性を尊重し、共感的な人間関係をはぐくむために、自分も相手も大切にしたい自己表現の習得をねらいとする授業を実施した。初めにアサーティブチェックテスト※³を実施し、生徒自身の自己表現の傾向を把握させた上で、適切な人間関係が構築できるような表現方法を考えさせた。その後、「自分の都合だけを優先する自己表現」、「自分よりも他者の都合を優先する自己表現」、「自分の都合も他者の都合も大切にしたいアサーティブな自己表現」の三つの表現の仕方を説明し、各自が考えたSNS使用上のルールの有効性とアサーティブな提案の仕方をグループごとに検討させた。

※3 ホームルーム活動資料（茨城県教育委員会 2002年）

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 振り返りシートによる意識の変容の検証

各授業直後に行った「振り返りシート」からは、友人とのよりよいコミュニケーションの方法について理解を示す生徒が回を追うごとに増加していることが分かった（図1）。

特に第4回授業後の回答においては、98.1%の生徒が「授業で学んだことを実生活に生かしたい」と

回答しており、適切な人間関係を築くことに対する意欲が向上したことが確認された。

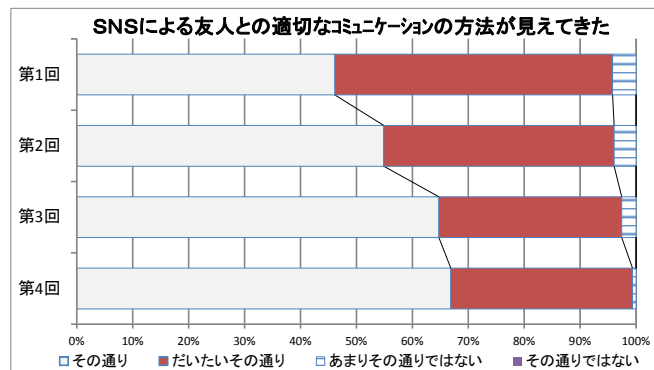


図1 振り返りシートによる意識の変容

(2) 事後アンケートによる行動の変容の検証

第4回の授業の中で生徒が考えた「SNS使用上のルール」について、その後の日常生活で守られているか、一ヶ月後に尋ねた。その結果、「守っている」「だいたい守っている」と回答した生徒の割合は合計で90.3%であった（図2）。このことから、生徒が自律的にルールを作成し、そのルールを友人に対してアサーティブに提案する、という活動が、日常生活における行動の変容と効果の維持により影響を及ぼすことが分かった。

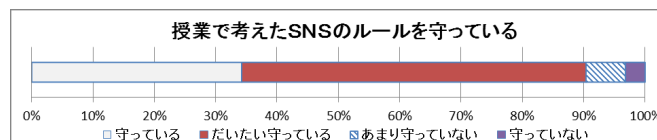


図2 振り返りシートによる行動の変容

また、「SNSを使用している時に周りに気を遣い過ぎて感じる」生徒の割合は、授業の前後で、32.9%から16.7%へ減少しており、情報通信機器を介した生徒同士のコミュニケーションの在り方を考えさせる授業が、生徒のより適切な人間関係構築の一助になることが確認された（図3）。

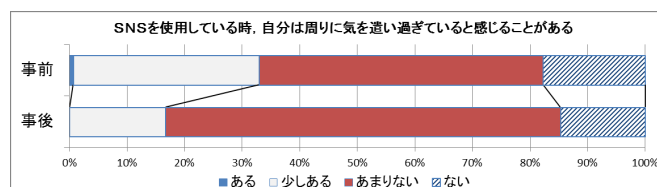


図3 事前と事後アンケートの比較

2 今後の課題

今後は、さらに予防すべき事例を明らかにするとともに、開発すべき能力並びにその能力を高めるための具体的な方法について、研究を進めていきたい。